Japanese Association of Educational Psychology

170 教育心理学研究, 1999, 47, 170—179

女性における子どもの価値

——今，なぜ子を産むか——

柏 木 恵 子[1]　永 久 ひさ子[1]

子どもの価値は普遍・絶対のものではなく，社会経済的状況と密接に関連している。近年の人口動態的変化——人口革命は，女性における母親役割の縮小と生きがいの変化をもたらし，子どもをもつことは女性の選択のひとつである状況を現出させた。子どもは“授かる”ものから“つくる”ものとなった中，子どもの価値の変化も予想される。本研究は，母親がなぜ子を産むかその考慮理由を検討し，子どもの価値を明らかにするとともに，世代，子ども数，さらに個人化志向との関連を検討することによって，子どもの価値の変化の様相の解明を期した。結果は，子どもの精神的価値として社会的価値，情緒的価値，自分のための価値が分離され，さらに子ども・子育てに関連する条件依存，子育て支援の因子も抽出された。子どもの価値はいずれも世代を超えて高く評価されているが，より若い世代，有職，子ども数の少ない層では，その価値が低下する傾向と条件依存傾向の増大が認められた。家族のなかに私的な心理的空間を求める傾向＝個人化志向は，世代を超えて強く認められたが，若い世代，有職，子ども数の少ない層でより強まる傾向が認められ，さらに，子どもを産むことへの消極的態度と関連していることも示唆された。この結果は，人口革命と女性のライフコースと心理との必然的関連，また子産みや子育てに関わる家族および社会規範との関連で論じられた。

キーワード：子ども，価値，女性，個人化，人口革命

問　　題

少子化と高齢化という人口動態的変化は，日本人のライフコースや労働・福祉などを規定する由々しい問題として注目を集めている。その影響はとりわけ女性に著しく，長い一生のなかで母親役割に費やす時間を縮小し，母親としてだけでは心理的に充足した生涯とはなりえない状況を現出させた。このような影響の大きさ，画期的変化をもたらしつつあるゆえに，“人口革命”といわれるのはあながち大げさとはいえないであろう。

ところで，高齢化は人類が長らく渇望してきた長寿の初の実現であるのに対して，少子化はそうではない。これまでにも少子の時代はあった，しかし，それは「多産多死の結果としての少子」であり，今日の少子が少産少死，産めば必ず育つ保証の下に生じた人為的な少子化という点で決定的に異なる。医学の進歩による乳幼児死亡率の急速な低下，他方，安全で確実な受胎調節の普及により，子どもは結婚ー妊娠ー出産の連鎖の中の自然・当然の“授かる”存在から，親が数や時期を決めて“つくる”ものへと変化した（中山, 1992）。これは人類史上初めてのこと，まさに革命と呼ぶにあたる画期的な変化である。こうした状況下，親における子どもの意味・価値も変化し，子どもへの感情や教育的行為までも変化させつつある。

子どもが価値あることは言を俟たず，その価値は普遍的だと考えられがちである。しかし広く長い視点からみると，子どもの価値は社会的状況と密接に関わって変化する（Hoffman & Hoffmann, 1973 ; Kagitcibasi, 1989 ; 柏木, 1998）。とりわけ社会の主たる生業，工業化の度合は，子どもに実用的経済的価値を認めるか精神的価値かを明らかに規定しており，豊かな先進工業国では子どもは経済的価値をもつ（家計を担う, 老後扶養など）どころかむしろお金のかかる存在，しかし「家庭を明るくし」「親の楽しみ」といった“精神的な”価値が期待されており，未発展・開発途上国における労働力や老後扶養など実用的経済的価値と著しい対照をなしている（日本女子社会教育会, 1995）。

このように精神的価値を期待される日本の子どもが，自然・当然誕生するのではなく多分に親たちの意思によって決定され誕生することは，子どもの価値が親にとって価値ある他の諸事物と比較検討されて，子どもを産むか否か，時期，数が決定されている事情を示唆している。ここには，親とりわけ子どもを産む女性の

[1] 白百合女子大学

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

生き方や価値観が大きく関与しているであろう。

従来，発達や教育の心理学において子どもは言を俟たず価値あるものとされ，その発達や教育に関連する諸要因が多々研究されてきた。しかし，人口革命の下，子どもの価値が変化しつつある今日，従来の「子どもにとっての親」ではなく，「親にとっての子ども」を問う必要がある。この問題は，母親の発達研究（たとえば大日向, 1988；山本, 1997）につながるものであるが，同時に，従来ほとんど等閑視されてきたおとなとりわけ女性の発達の問題でもある。

方　法

目　的

従来の諸調査での設問「子どもとはなにか」（日本女子社会教育会, 1995）「子どもをもつことのよさ」（阿藤, 1996）を問われれば“精神的”な諸価値ありと答える，それにいつわりはなかろう。しかし，その価値はなにをおいても選択される絶対的な最高のものではなく，他の価値と比較検討された上で選択される相対的なものとなりつつある。この間の事情を知るには，従来の「子どもとはなにか」という設問では十分ではない。子どもの価値の本音は，理想の子ども数をもたない理由で一部検討されている（国立社会保障・人口問題研究所, 1997）が，子を産む動機や理由により如実に反映されているであろう。本研究は，そこに踏み込んで子どもの価値の様相を明らかにすることを試みる。また異なる世代，職業の有無，子ども数との関連，さらに，近年著しい女性・母親の個人化傾向が子どもをもつという選択とどう関わるかについても検討する。女性のライフコースの変化，産業化の進展，高学歴化と関連して，家族の機能と家族役割の問い直しが進み家族のなかで心理的・物理的に独立の個人空間を求める傾向が女性を中心に強まりつつある（目黒, 1987）。それは，女性・母親における子どもの価値と密接に関わっていると推定される。この検討を通じて，女性・母親における子どもの価値の社会的背景について考察する。

手続き

1.子どもを産む際の考慮理由・動機　2.家族のなかでの個人化志向　3.回答者の諸属性に関する調査項目からなる質問紙法による。

調査尺度

第1について，まず，子どもとは何か，なぜ子を産むのか，その際の考慮事項，産む時期や数を決定する際の要因などについて，さまざまな世代（年齢）と立場（職業の有無, 学歴など）の女性との半構造的面接・対話を行った。そこから採集された子どもを産む際の考慮事項・動機・規定因に関する資料に準拠し，さらに関連先行研究（厚生省・人口問題研究所, 1993；阿藤, 1996）も参照して，子どもを産む際の考慮事項に関する項目を選定した。

第2については，目黒（1987）の理論に準拠した枠組みに沿って，さまざまな年代の女性を対象に行った半構造化面接から得られた資料に基づいて，家族内で個人の欲求充足，夫婦間に心理的私的領域を求める傾向，逆に夫婦間の心理的な一体感に関する項目を選定した。

回答は，「そのとおりあてはまる」，「全くあてはまらない」を両極とする4段階での評定を求める形式をとった。1については，第一子の場合から始まり次の子どもの場合へと順次回答を求めた。

調査対象

すでに子どもを産み終えた（人口統計から推定した）2世代；40歳（±2歳）235人，および60歳（±2歳）248人の既婚有子の女性。東京都内私立女子大学卒業生名簿の該当年齢からランダムに抽出した。この世代を選定したのは，従来の産む予定・可能性のある子どもについての調査（厚生省・人口問題研究所, 1993）では，仮定的回答のため解釈が多義的・困難なことに鑑み，出産を終えた女性における子産み事情についての回答によって，より現実的な資料を得ることを期したからである。

調査時期

1997年11～12月。調査の問題意識・目的，研究者の紹介とともに質問紙を郵送し，回答の記入後返送を求めた。回収率は61％で，回答に付記された自由記述や結果情報希望などから，問題に対する強い関心と回答への真摯な態度が伺われた。

結果および考察

1　子ども数および対象者とその配偶者の同胞数

2世代の調査対象の子ども数および自分と配偶者（夫）の同胞数は，本研究の問題に関わる少子化傾向を伺い得る資料である。子ども数は，40歳群で平均2.14（SD.74），60歳群で平均2.37（SD.79）で，その差は有意である（t＝3.26）。子ども数の分布ではさらに差は顕著で，子どもなしが40歳群では8.6％，60歳群では3.9％，逆に4人以上のものは40歳群では3.2％にすぎないが60歳群では7.1％で，この20年の世代間に少子化が進行していることが見て取れる。

それは，本人およびその配偶者の同胞数に一層顕著である。60歳群の同胞数平均は本人3.39（SD .84），夫3.42（SD .97）であるのに対して，40歳群では本人

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

2.33 (SD .84)，夫2.58 (SD .88)，そして40歳群の大半が本人も夫も2人きょうだいだが，60歳群では大半が4人きょうだい，というふうに歴然とした差（本人について t=13.70, 夫について t=10.03 いずれも p<.001 で有意）があり，少子化への軌跡はさらに明白である。

2　子どもを産む際の考慮理由・動機の構造

子どもを産む際の考慮理由・動機（以下では<子産みの理由>と略記）について，質問項目群の構造を検討し比較の軸となりうる有意味な次元の特定を探るために，全対象者およびすべての子どもに共通する質問項目（30項目）への回答データについて，探索的に因子数を3から7までの主成分分析・Varimax 回転を行い，累積説明率が50%を超えること，因子の安定性と解釈可能性の条件からわれわれの理論的仮説とも一致する5因子に決定した。Varimax 回転後の因子構造（TABLE 1）について，次のような解釈・命名を行い，子産みの理由に関する5次元とした。

TABLE 1　「子産みの理由」項目の因子分析結果

	因子 I	II	III	IV	V	平均値	SD
年を取った時子どもがいないと寂しい	.78	.11	.04	.21	-.04	2.43	1.06
子どもがいると生活に変化が生まれる	.69	.16	.31	.01	.06	2.60	1.00
年を取った時子どもがいると安心	.67	.04	.14	.25	.15	2.25	.94
血のつながった存在が欲しかった	.57	.17	.25	.38	.07	2.24	1.02
家庭がにぎやかになる	.54	.03	.49	.03	.11	2.97	.96
子どもを持つことで夫婦の絆が強まる	.54	.12	.21	.40	.08	2.21	.97
配偶者が欲しがった	.50	.11	.08	.02	.24	2.34	1.06
子孫を残したかった	.48	.15	.05	.37	.19	1.75	.96
経済的ゆとりができたので	.12	.73	.07	-.08	.28	1.44	.73
友達が子どもを産んだので	-.02	.71	.05	-.14	-.01	1.29	.61
自分の生活に区切りがついた	.18	.70	-.01	-.03	-.06	1.24	.59
夫婦関係が安定した	.07	.68	.07	.05	.30	1.44	.74
2人だけの生活は十分楽しんだ	.23	.65	.04	-.07	-.15	1.60	.85
自分の仕事が軌道にのった	-.10	.57	.08	-.10	.31	1.18	.48
周囲に勧められた	.06	.54	-.19	.31	.13	1.23	.55
育児に自信が持てるようになった	.35	.43	.15	-.03	.25	1.38	.59
子どもを育ててみたかった	.17	.14	.78	.19	-.10	3.19	.92
子どもが好きだった	-.07	-.08	.71	-.02	.33	2.77	1.03
子育ては生き甲斐になる	.21	.05	.67	.25	.14	2.80	.99
子育てで自分が成長する	.47	-.01	.55	-.0619	-.05	3.08	.92
配偶者の子どもが欲しかった	.26	.03	.49	.36	.13	3.00	.96
女性として，妊娠・出産を経験したかった	.30	.21	.46	.40	-.13	2.88	1.01
子を産み育ててこそ一人前の女性	.25	.06	.19	.67	-.08	2.52	1.04
結婚したら子どもを持つのが普通だから	-.03	-.16	.23	.67	.15	3.24	.91
次の世代を作るのは，人としてのつとめ	.38	.03	.03	.51	.12	2.18	1.01
姓やお墓を継ぐ者が必要	.38	-.03	-.07	.44	.42	1.53	.85
住宅事情が整ったので	.36	.25	.05	.10	.56	1.49	.74
よい保育園があったので	.02	.07	.15	-.01	.54	1.28	.71
親が楽しみにしていた	.39	.10	-.06	.29	.47	2.11	1.01
子育てを手伝ってくれる人がいたから	.10	.30	.04	.12	.42	1.39	.74
寄与率(%)	25.7	10.6	6.1	4.6	4.0		
累積寄与率 (%)	25.7	36.3	42.4	47.0	51.0		
α係数	.85	.81	.78	.65	.56		

第1因子は，子どもが家庭や夫婦に安心や楽しさ，絆をもたらすなどの情緒的な価値を中核に，血縁や子孫など伝統家族的なニュアンスも含むものから成ることから，<情緒的価値>と命名することとした。第2因子は，経済，夫婦関係，仕事，おけいこ，旅行などの都合や時期など，子産みの決断が自分や夫婦間の条件整備に依存していることを示す項目から成ることから，<条件依存>と命名した。ここには，友人や親などからの刺激や勧めも含まれているが，これらも自分自身の動機ではなく外的な働きかけである点で一種の条件依存とみなせよう。第3因子は，子育てや子ども，分娩・出産そのものを経験したい，生きがいや成長になるなど，自分自身にとっての子どもの意味や価値であることから，<自分のための価値>と命名した。第4因子は，子どもをもつのは普通，一人前となる，次世代や家の継承のためなど，いずれも子どもに社会的な役割・価値を付与したものであることから，<社会的価値>とした。第5因子は，住宅，保育園，親や手伝いなど，子育ての援助に関するものであることから，<子育て支援>とした。

以上の5因子は，先行研究および予備的に行った個別面接調査からあらかじめ想定されていた子産みの理由・条件や子どもの価値を反映しており，加えて近年の変化も捉えうる点で，本研究目的に沿った有用な分析軸として採用することとした。

5因子中，<情緒的価値><自分のための価値><社会的価値>の3つは，いずれも子どもの存在がもたらす精神的な価値であり，従来，実用的・経済的価値に対する精神的価値として一括されて扱われ，それ以上の分析的な検討はされていない。しかし，ここには“誰にとっての”精神的価値か，どのような意味での価値かに関して，質的に異なるものが含まれていることを，ここで分離して示し得たといえよう。

残る2つの因子<条件依存><子育て支援>は，子どもそのものの価値というよりも，子育てに関するもので，子育てが母親にとって常にプラスのものではなくむしろ条件によってはマイナスにもなりうる，その条件に関わる因子である。今日，子どもの価値が無条件・絶対的なものではなくなりつつある事情を反映し

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 2　子産みの理由の世代差

	40歳 平均値 (SD)	60歳 平均値 (SD)	t	
第Ⅰ因子 情緒的価値	2.38 (.67)	2.31 (.71)	.95	
第Ⅱ因子 条件依存	1.43 (.46)	1.27 (.37)	4.07	***
第Ⅲ因子 自分のための価値	2.91 (.69)	3.00 (.66)	−1.51	
第Ⅳ因子 社会的価値	2.17 (.66)	2.55 (.63)	−6.54	***
第Ⅴ因子 子育て支援	1.57 (.51)	1.56 (.55)	.04	

*** p<.001

ており，子どもの価値の変化をみる上で注目すべき重要な因子であろう。

3　世代差の検討

＜子産みの理由＞の代表値として各次元の負荷量の高い(.40以上)項目の平均値を用い，世代を異にする2群の特徴および2群間の差の検討を行った。5因子の2世代群の得点はTABLE 2のとおりである。子産みの理由得点を従属変数とし，世代と5理由(因子)を独立変数とする2×5の分散分析を行った。結果は子産みの理由の主効果は有意 ($F(4,1772)=1055.1$, $p<.001$) であり，Tukeyの多重比較を行った結果，全ての理由間に有意差が認められた。世代の主効果は有意ではなかったが，理由との間に有意な交互作用が認められた ($F(4,1772)=20.70$, $p<.001$)。そこで世代群別に5理由間の差についてTukeyによる多重比較を行ったところ，40歳群ではすべての理由間に有意差 ($p<.05$)，60歳群では＜社会的価値＞と＜自分のための価値＞との間にのみ有意差が認められなかった（他の理由間はいずれも $p<.05$)。

この結果でまず注目されるのは，子どもの価値因子いずれもが両群で極めて高いことである。このことは，子どもの存在がもたらす価値を母親は世代を超えて高く認め，産みたい動機は決して低くないことを示している。3種の価値中＜自分のための価値＞は，両群とも1位で，得点も2群間に差はなく，どの世代の母親も子どもはなによりも自分にとっての意味や価値あるものと考えているといえよう。

しかし，次の点では世代による差がある。すなわち，60歳群では2位の＜社会的価値＞が1位の＜自分のための価値＞とは有意差ないのに対して，40歳群では3位，そして得点は両群間で有意差があり，この価値が年長世代で重視されているが若い世代では後退している。子育てに関する条件関連の2因子は，両群いずれでも4，5位と，他の因子中の相対的ウエイトは低く，子どもの価値を凌駕するほどの要因ではない。しかし，＜条件依存＞では2群間に有意差があり若い世代でより強い。

20年の差のある2つの世代が，子どもの価値を認めることにおいて基本的には等しいものの，若い方の世代で社会的価値の後退，条件考慮の増加へと変化している様相は，両群間に有意差のある項目をみると一層明瞭である。すなわち，60歳群で特徴的な項目(40歳群と有意差のある）は，「子どもをもつことが普通」「一人前」，「次の世代を作るのは，人としてのつとめ」「子どもが好きで生きがいとなる」などで，子産みを自然・当然とみ，次世代や家などを念頭におく年長群の傾向が読み取れる。これに対して40歳群に有意に高い「妊娠・出産を経験したい」「2人だけの生活は十分楽しんだから」「自分の生活に区切りがついた」などから，子どもは社会や家など他のためではなく自分自身のため，そして自分たち夫婦の状況重視の特徴が認められる。子どもは“生まれる”“授かる”から，子産みは条件と勘案して“つくる”ものという認識，換言すれば“産む”という女性の主体的判断結果となる方向への転換が，ここに跡づけられる。

4　子ども数による差の検討

子産みが女性・母親による子どもと他の選択肢との相対的比較検討の上での選択である様相が示唆された。だとすると，何人子どもをもっているかによって，どのような理由を考慮・重視したかに差がある可能性が考えられる。少子化が進行し2人っ子が一般的となった今日も，なお大勢の子どもをもつ親は決してなくなってはいない。この層では，少ない子どもをもつ層と比べて子どもの価値や子産み・子育てへの態度において異なる特徴があるのではなかろうか。

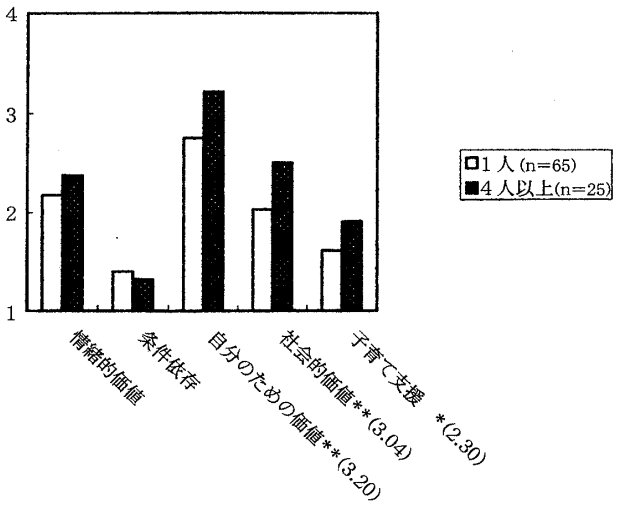


FIGURE 1　1人っ子親および多子親(4人以上)における子産みの理由　* p<.05　** p<.01

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

この点を検討するために，多子(4〜5人)の親と1人っ子の親とを対照的な群として選定し，両群について＜子産みの理由＞の比較を行った（FIGURE 1)。

多子親は＜条件依存＞を除くすべての因子で得点がより高く，＜自分のための価値＞ ＜社会的価値＞さらに＜子育て支援＞において両群間差は有意である。他方，1人っ子親群で有意に高いのは「2人だけの生活は十分楽しんだから」である。これらは，多子の親が子どもをもつことに対してより積極的意味・理由を認め，それゆえ子どもを産むにあたって＜条件依存＞を考慮することが少なく，子どもをもつことへの無条件にも近い積極的な姿勢を伺わせる。そうした態度の結果としての多子なのであろう。

子ども数による子どもを産むことへの態度の差は，1人っ子親のみに対して行った質問「それ以上産まない理由」つまり1人っ子にした理由への回答からも伺える。すなわち，「自分のことをする時間がなくなる」「生活のリズムを崩したくない」「また子育てするのは億劫」「受験や教育のことを思うと気が重い」などが上位に挙げられ，親自身の生活や時間を重視し優先する態度と子育てに伴って親が負う心理的経済的負担感などが，子どもを少なくする方向に働いている様相を伺わせる。

既にみたように，若い世代群で少子化への軌跡が認められていたが，そのこと自体，子どもを産むことが選択の結果である傾向の強まりを物語っている。

なお，多子親群における＜子育て支援＞の高さは，4〜5人の子どもを産み育てるには母親を助けるなんらかの条件が必要であり，それが満たされたことが多子を可能にしたのかもしれない。最近の止まることをしらない少子化の背景には，こうした支援が現に乏しく，また支援を期待しにくいと女性に認識させる状況があるからではなかろうか。

5　女性における個人化の測定とその傾向

世代や子ども数の違いによる子産みの理由の差は，母親における子どもの価値の相対化と自分の側の条件重視を反映していた。そのことは，母親であることや育児・家事などの家族役割を自分の人生のなかにどう位置づけるか，またどのような家族の在り方をよしとするかが，子産みの選択・決断にあたって重要なキーであることを予想させる。

従来，家族は暖かい支援の場であり，女性が家族役割を担うのは当然，それは家族の幸福にも女性の幸福にもつながるとされてきた。しかし，家族は常に共通の利害をもつものではなく，成員間で利害はしばしば対立・衝突する。とりわけ育児・家事などの世話役割の授受関係にある妻と夫間には利害対立やずれは著しく（柏木・若松, 1994；柏木・数井・大野, 1996)，これと連動して妻の側に家族内に自分個人の私的領域や個別行動を求める動きが強まっている（目黒, 1987)。この家族における個人化志向は，従来，社会志向的傾向がより強いとされてきた女性に個人志向性が男性同様に強いという知見（伊藤, 1993）とも無関係ではないであろう。

TABLE 3　「家族の個人化」項目とバリマックス回転後の因子負荷量行列

「家族の個人化」項目	F1	F2	F3	平均	SD
子どもの喜びは私の喜びだ	.72	-.11	-.04	3.28	.67
夫の喜びは私の喜びだ	.67	.37	-.10	2.85	.87
夫が言わなくても，夫の気持ちがわかる	.57	.19	-.12	2.50	.79
自分が犠牲になっても，家族を第1に考える	.55	.19	-.11	3.13	.74
言葉で言わなくても夫には私の気持ちがわかる	.53	.34	-.22	2.16	.86
夫婦は一心同体だ	.47	.45	-.26	1.96	.79
夫のものは私のものだ	.03	.80	-.18	2.10	.88
私のものは夫のものだ	.25	.78	-.24	1.98	.86
妻の事情での単身赴任など考えられない	.20	.49	.07	2.22	.97
家族からでも，邪魔されたくない時間がある	-.08	-.08	.81	3.61	.65
自分の世界を持つことは私にとって重要だ	-.07	-.11	.77	3.69	.57
夫婦でも「私は私」	-.24	-.10	.62	3.64	.60
寄与率(%)	18.9	17.1	15.7		
累積寄与率(%)	18.9	36.0	51.7		
α係数	.73	.60	.63		

このような家族のなかで個人としての欲求充足いかんは，子産みにあたって勘案されるにちがいない。実際，既にみた子産みの際の考慮理由のなかにも，自分の生活や欲求と比較検討している様相が伺えた。この点をさらに踏み込んで家族のなかでの個人化志向を，今回は家族のなかに「私」という個人を求め，夫とは別個に心理的物理的な私的領域を求める傾向に絞って検討することとした。

測定は，上記の家族・夫婦間における個人化，個別的欲求充足に関する価値を示す設問12項目に対して，どの程度重視するかの評定を求めるものである。全調査対象のデータに基づいて主成分分析・Varimax 回転を行い，累積説明率が50%を超えるところで3因子を得，解釈可能であることからこれに確定した（TABLE 3)。

第1因子は，夫と自分(妻)とは一心同体であるとし，家族との強い絆を認める意見群からなるもので，＜夫婦一心同体＞と命名した。第2因子は，夫婦の経済と生活の共有に関するもので＜経済の共有＞と命名した。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 4　2世代群における個人化得点（平均と SD）

	40歳群	60歳群	t	
夫婦一心同体	2.52（.50）	2.77（.51）	−5.35	＊＊＊
経済の共有	1.94（.60）	2.26（.70）	−5.05	＊＊＊
私個人の世界	3.69（.42）	3.61（.49）	1.94	

＊＊＊ p<.001

第３因子は，家族や夫とは別個な自分の世界を重要とする意見群からなり＜私個人の世界＞と命名した。

第１，第２因子間には高い正相関（.518）があり，伝統的な夫婦の心理的物的絆を示すものとみなしうるのに対して，第３因子は他の２因子とは負相関関係(-.390, -.330)にあり，家族のなかの個人化志向を示すものとみなしうる。

これら３因子の得点を２世代群別にみる（TABLE 4）と，いずれの群でも＜私個人の世界＞は他を凌いで極めて高く，女性が家族のなかで心理的時間的な私的領域を求める傾向，個人化志向が世代の違いを超えていかに強いかを示している。これに対する＜夫婦一心同体＞は順位ではこれに次ぐものの，その値は有意に低い。しかもその得点には世代差があり，40歳群は60歳群に比べて有意に低い。さらに夫婦間の＜経済共有＞でも世代差があり，若い世代では消極的傾向にある。

こうした世代差は両群間に有意差のある項目内容から一層明らかで，「自分が犠牲になっても家族第一」「夫の喜びは私の喜び」「夫がいわなくても気持ちがわかる」が60歳群で有意に高く，他方，40歳群では「夫婦でも「私は私」」が有意に高い。さらに職業の有無による差もあり，有職群では＜夫婦一心同体＞ ＜経済共有＞とも無職群より有意に低く(t=2.2　t=3.4)，女性が職業・経済力をもつことは物心両面で夫からの独立，夫婦間の個人化を推進することを示唆している。＜私個人の世界＞については職の有無，世代を超えて極めて高く，群間差はない。しかし，有職群の方でより高い傾向から，職業をもつことは一体感・経済共有を後退させ個人化を進める可能性を伺わせる。

（なお，世代と職業とを組み合わせた群間差は，今回は，数の限界もあって取り扱えないが，参考資料として注として挙げておく。）[2]

6　個人化志向と子どもを産むことへの態度

このような個人化志向は，子どもの価値や子産みへの態度とどのように関係しているであろうか。個人化の３因子と子産みの理由5因子間の相関によって概観しよう（TABLE 5）。

まず注目されるのは，個人化志向を示す＜私個人の世界＞が産む理由の因子と負相関関係にあり，他方，反個人化を示す２因子は産む理由の因子と正相関関係にあることである。これは世代別にみた場合にも同様である。相関は有意ではあるがその値は低いので，結論的な解釈は避けねばならない。しかし，ここにみられる一貫した相関パターンは，女性の個人化志向が強くなるほど，子どもをもつことへのいかなる理由についても消極的になる，とりわけ子育てがもたらすマイナス条件を考慮する傾向を強め，逆に夫婦間の心理的・物的一体感の強さは子産みへの積極的態度，子どもの価値をより強く認める傾向と結びついている可能性，を示唆している。

母親の個人化傾向と子産みとの関係をより具体的な形でみる試みとして，個人化傾向に関して典型的と想定される群を設定し，その属性や特徴をみることによって検討してみよう。

個人化３因子の得点の組み合わせで，＜夫婦一心同

TABLE 5　個人化因子と子産み理由因子の相関

	夫婦一心同体	経済の共有	私個人の世界
情緒的価値	.25＊＊	.20＊＊	-.13＊＊
条件依存	.05	.09＊	-.03
自分のための価値	.32＊＊	.20＊＊	-.09＊
社会的価値	.23＊＊	.28＊＊	-.07
子育て支援	.14＊＊	.13＊＊	-.13＊＊

＊ p<.05　＊＊ p<.01

[2]

年代	40代	(n=235)		60代	(n=248)	
職業	無職	有職	その他	無職	有職	その他
人数	11	16	208	32	4	212
%	4.7	6.8	88.5	12.9	1.6	85.5
夫婦一心同体	2.71(.46)	2.51(.55)		2.82(.56)	2.17(.58)	
経済共有	2.06(.53)	1.65(.41)		2.26(.78)	2.00(.33)	
私の世界	3.55(.50)	3.73(.31)		3.59(.48)	3.83(.19)	

本研究では，無職・有職の定義を以下のように，厳密なものとした。

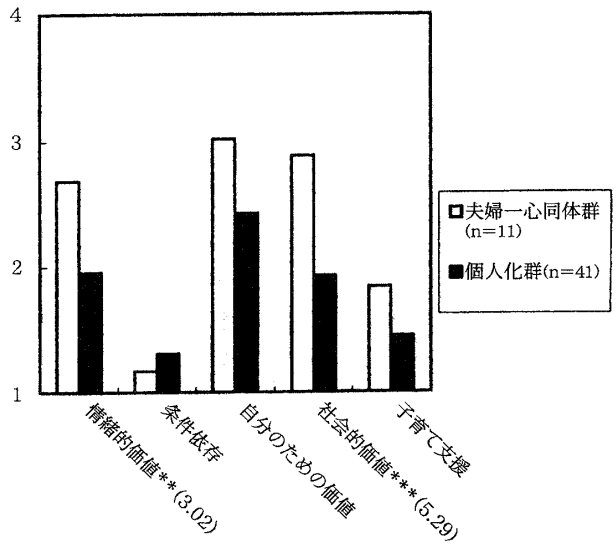
無職：現在無職で，今までに１度も働いたことはない（結婚退職・出産退職は含まない）。

有職：現在有職で，これまで１度も退職せずに働いている。または(60代では)，１度も退職せずに，定年まで働いた（したがって，子育て中も有職であった）。

その他：パート・自営・フリーのほか，結婚退職・出産退職も含む。
また，現在正社員でも，１度退職した者・途中から就職した者もここに入る。
このように極めて多岐多様にわたる群なので，得点は省略する。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



** p<.01 *** p<.001

FIGURE 2 夫婦一心同体群と個人化群における子産みの理由

体>および<経済共有>が強く(高得点15%以内),他方<私個人の世界>は相対的に低い(低得点15%以内)群(=夫婦一心同体群)と,逆に<夫婦一心同体><経済共有>は低く(低得点15%以内),他方<私個人の世界>は4.0と最高得点,つまり個人化傾向の強い群とを設定し,両群の子産みの理由を比較してみる(FIGURE 2)。

両群の特徴を明確に対照的にすべく基準を厳しくしたためN数が大きく異なるので,結論は避けねばならない。しかし,ここで顕著に認められるのは,子どもの価値はすべて夫婦一体感の強い層で高いことである。3つの価値<情緒的価値><自分のための価値><社会的価値>間には同群内で差はないが,もう一方の個人化傾向の強い群に比べると,<社会的価値>の高さにおいて最も大きな差があり,さらに情緒的価値でも有意差がある。つまり,夫との一体感が強く個人化傾向の弱いものでは,子どもの精神的価値を高く認め,とりわけ子どもは社会的な意味・価値をもつという認識が強い。他方,個人化傾向の強い母親では,子どもの価値への評価は全体的により低いが,その中では<自分のための価値>を最も大きく認めている。

以上のことは,近年,女性に強い個人化志向が子どもの価値の認識を変化させ,子どもを相対化して捉える傾向を促す可能性を示唆している。このような傾向が今後どのようになってゆくかが,両群を構成するサンプルの属性から示唆される。夫婦一体群には60歳世代のものが多く含まれ,無職つまり専業主婦率が圧倒的に高く,有職者は1人に過ぎず,そして子ども数は多い方に偏っている。他方,個人化群は若い40歳世代の大半がこれに属し,また有職者の占める比率が高く,子ども数は少ない方に偏っている(因みに1人っ子は,41人中10人に上る)。ここから,今日の若い母親層では個人化は一層進み,子どもの価値の変化と子産みを自分の人生のなかでの選択,相対的な事件とする傾向が一層顕著であろうと予想させる。さらに,職業をもつものが無職の専業主婦を上回った今日,その傾向はさらに助長されているのではなかろうか。さきの個人化傾向の強い群の特性から,有職化は個人化志向のひとつのあらわれとみなすこともできるからである。

全体的討論および今後の課題

子どもを産む際の考慮理由の構造とその規定因を探ることによって母親にとっての子どもの価値を検討し,3種の子どもの精神的価値すなわち社会にとっての価値,自分や家族にとっての情緒的価値,自分自身のための価値,加えて子育て支援,内的外的条件依存の,子産みの条件・制約的な次元が確認された。子どもがもたらす価値はいずれもどの世代においても高く,子どもが精神的価値あるものとされていることが確認できた。

しかし,精神的価値なるもののうちどの面を重視するかについて,世代,職業の有無,子ども数などによる差が見出された。年長世代,無職,多子の親は,子どもは自然・当然の存在,いわば絶対的な価値をもつ存在とみ,とりわけ社会的な価値を強く認める傾向が強いのに対して,より若い世代,有職の,少子になるに伴い,子どもは自分自身の成長や経験の上での価値が大きな比重を占めるようになり,さらにその価値も無条件ではなく,子育てのマイナス要因を低減するよう条件を検討して子産みを決定する傾向を強め,子どもの価値は相対的な性格を増す方向にある。

この方向は,少産少死ー少子化および長寿命化という人口革命が女性にもたらした必然と予想された。女性が母親であるだけではもはや充足し幸福な人生を全とうすることも,高い自尊を保持させることも不可能とし(岡崎・柏木,1993;渡辺,1996),おりしも医学の進歩が子産みを親の選択・決定とすることをほぼ完全に可能とし,母親になることは女性の人生における1つのオプションとなった。かつて女性の人生に当然のこととして組み込まれていた子どもをもつということは,ますます意識的な熟慮,計画,希望,心配や不安の的に成りつつある(ベック=ゲルンスハイム,1995)といえよう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

本研究は，この間の事情をかなり明らかにした。20年という歳月，有職率の上昇がこうした変化を推進し媒介する役割を果たし，結果として少子化が現出している。子どもの価値の相対化，親の側の条件がより重視される方向への世代的な変化，１人っ子の親における子どもの価値のより低い評価などは，近年の少子化の背景を示唆するものであろう。

子産みが条件依存傾向を帯びることは，すなわち子どもの意味・価値の相対化つまり母親自身の生活や価値観によって大きく左右されることを示唆する。このことは，子産みにあたって吟味される条件なるものの多くが，自分の生活，仕事，夫婦関係，経済など，母親の生き方や価値観を反映した事柄であった事実からも明らかである。

女性は母親としてだけでは充実感も自尊感情ももち難い今日，母でもなく妻でもなく１人の個人としても生きたいとの願いは母親一般に強い。しかし，わが国では子育ての責任は産んだ者＝母親が主として担うべきとの規範が強く，かつ現実もそうなる現状では，子どもの存在と母親の個人としての生への希求とはしばしば葛藤することになる（柏木・若松, 1994）。本研究での若い世代に強い条件依存傾向は，子どもの価値の低下を直ちに意味しない。子どもをもつという選択が，女性にとってマイナスにならないような条件を模索し，その上で価値ある子どもをもちたいと考えている葛藤的状況を反映している。

母親における子どもの意味は，母親のライフスタイルや価値観によって異なることが示唆されている（阿藤, 1996；山本, 1997）。本研究では，家族のなかで個人としての心理的領域を求める傾向が，世代や子ども数，さらに子どもの価値，子どもをもつという選択の過程と関連しているとの予想を，ほぼ支持する結果を得た。若い世代ほど，有職で，子どもの少ない層ほど，個人化志向は強い。そして，個人化志向は子どもを産むことを消極的にさせる方向と結び付いている。個人化への志向は全調査対象に一貫して極めて強いが，さらに世代を追うに従ってさらに強まる傾向があることは，子どもの価値の相対化が今後より一層進むことを予測させる。

しかし，ここで見落としてはならないのは，女性の生き方や価値観は，女性を囲む家族とりわけ配偶者や社会のありようと密接に関係していることである。母親の育児不安や子どもへの否定的な感情が夫の子育てへの態度によって低下する事実（牧野, 1982；柏木・若松, 1994；数井・無藤・園田, 1996）は，母親の個人化志向が，母親を含む家族のありようによって左右される可能性を示唆する。加えて，母親による子育てをよしとする社会規範も，子どもをもつ選択と母親の個人化志向との葛藤を大きくしていることは無視できない。他国に比して日本の母親に育児不安がより強くかつ広くみられる事実（日本女子社会教育会, 1995；亀山・飯長, 1995）は，この間の事情を示唆している。

最後に，本研究の問題点，残された課題をその背景とともに述べる。

まず第１は，より若い層についての研究の必要である。有職化，家族のなかの個人化が進みつつある中，子どもの価値の相対化，条件依存傾向，子どもの＜社会的な価値＞が後退し，＜自分にとっての価値＞がクローズアップしていく傾向のゆくえに関心がもたれる。とりわけ，若い世代群に極めて高かった「妊娠・出産を経験したい」は，女性であることへの自負，女性性の確認の動機なのだろうか。「子どもだけは生みたい症候群」（古沢, 1996），妊娠から出産にいたる体験を詳細に描いた「私たちは繁殖している」（内田, 1994）は，結婚ー妊娠ー出産という連鎖が崩れ，結婚の魅力も薄れてきた反面，妊娠・出産という女性ならではの体験への関心の強まりを物語る。これは，人口革命下に現出した“体験欲”とでもいうべきあたらしい女性の動機ではなかろうか。子どもへの欲望は，女性の「私の子ども」という欲望に収れんされていくとの予想（浅井, 1995）を確かめる上で，未婚層も含めて詳細な検討が望まれる。

第２の課題は，より広い学歴層についての検討である。日本の女性・母親の意識や行動は教育歴と密接に関連し，高学歴化は価値・行動の欧米化の方向をとることが諸所で確認されている（阿藤, 1996；東・柏木・ヘス, 1982；若松・柏木, 1994）。本研究結果は高学歴化が急激に進む日本の女性の変化の方向を示唆するものと考えられる。しかし本研究対象が高学歴層であることは，本研究の限界であり結果を一般化することには慎重でなければならない。高学歴化が急激に進むなか，女性の変化の方向を示唆するものと考えられるが，より幅広い学歴層について検討することによって，今回見出された子どもの価値および個人化志向の様相をより鮮明に跡づけることができるであろう。さらに本研究で示唆された職業の有無による変化も，学歴とも関連して十分な検討が必要である。

さらに検討すべきは，“つくる”子に対して親が行っている教育である。幼少時から大学入学にいたるまでの教育過熱，子ども産業の隆盛，成人後もつづく親の経済的心理的援助などは，親の愛情の発露というには

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

あまりに過度（杉山, 1996；汐見, 1997），その挙句，子育ては「気苦労が多い，楽しくない」としている（日本女子社会教育会, 1995）。こうした教育熱と子育ての負担感の背景に，子どもの価値の変化，つくった子どもをあたかも自分のもちもののよう遇する，また親の自己実現の手段とする心理があるのではないか？こうした親，子ども双方の発達に関わる問題は，子どもの価値と密接につながる問題として無視できないからである。

最後に，家族役割の認識と現実を男性・父親・夫について検討する必要を提起したい。世代を超えて母親に強く認められた個人化への志向は，その配偶者である夫ではどうであろうか？それは，女性・母親における子産みの条件と深く関わる故に，夫婦双方について家族システム的視点からの検討が必須である。

引用文献

浅井美智子　1995　生殖技術による家族の選択は可能か　浅井・柘植編　つくられる生殖神話―生殖技術・家族・生命―　制作同人社　Pp.91―123.

阿藤　誠　1996　親子関係からみた家族変容の行方―核家族化か個族化か―　「平等・共生」の新世紀へ　毎日新聞社・第23回全国家族計画世論調査　毎日新聞社人口問題調査会編　Pp.43―63.

東　洋・柏木恵子・R.D.ヘス　1982　母親の態度・行動と子どもの知的発達―日米比較研究―　東京大学出版会

ベック＝ゲルンスハイム, E.　木村育世訳　1995　子どもをもつという選択　勁草書房

Hoffman, L.W., & Hoffman, M.L.　1973　The value of children to parents. In Fawcett J.T. (Ed.), *Psychological Perspectives on Population*. New York : Basic Books.

伊藤美奈子　1993　個人志向性・社会志向性に関する発達的研究　教育心理学研究, **41**, 293―301.

Kagitcibasi, C.　1989　Family and socialization in cross-cultural perspective : A model of change. *I*n Nebraska Symposium on Motivation vol.37, *Cross-Cultural Perspectives*. University of Nebraska Press.　Pp.135―200.

亀山美津子・飯長喜一郎　1995　母親の育児不安についての日米比較調査　家庭教育研究所紀要, **17**, 14―21.

柏木恵子　1999　子どもの価値　東・柏木(編)　移動する社会と家族Ⅰ　社会と家族の心理学　ミネルヴァ書房　Pp.163―195

柏木恵子(編)　1998　結婚・家族の心理学　ミネルヴァ書房

柏木恵子・若松素子　1994　「親となる」ことによる人格発達―生涯発達的視点から親を研究する試み―　発達心理学研究, **5**, 72―83.

柏木恵子・数井みゆき・大野祥子　1996　結婚・家族観の変動に関する研究(1)―(3)　発達心理学会第7回大会発表論文集, 240―242.

数井みゆき・無藤　隆・園田菜摘　1996　子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について　発達心理学研究, **7**, 31―40.

厚生省・人口問題研究所　1993　日本人の結婚と出産　第10回出生動向基本調査, 第1報告書

国立社会保障・人口問題研究所　1997　第11回出生動向基本調査―結婚と出産に関する全国調査　夫婦調査の結果概要

古沢由美子　1996　子供だけは生みたい症候群　芸神出版社

牧野カツコ　1982　乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞　家庭教育研究所紀要, **3**, 43―56.

目黒依子　1987　個人化する家族　勁草書房

中山まき子　1992　妊娠体験者の子どもを持つことにおける意識―子どもを＜授かる＞・＜つくる＞意識を中心に―　発達心理学研究, **3**, 51―64.

日本女子社会教育会　1995　家庭教育に関する国際比較調査報告書

岡崎奈美子・柏木恵子　1993　女性における職業的発達とその環境要因に関する研究　発達研究, **9**, 61―72.

大日向雅美　1988　母性の研究―その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証―　川島書店

汐見稔幸　1997　幼児教育産業と子育て　(子どもと教育)　岩波書店

杉山由美子　1996　0歳からの知育競争　斎藤茂男編　子どもの世間　小学館　Pp.87―108.

内田春菊　1994　私たちは繁殖している　ぶんか社

若松素子・柏木恵子　1994　「親となること」による発達―職業と学歴はどう関係しているか―　発達研究, **10**, 83―96.

渡辺恵子　1996　青年期後期における性役割の認知と自尊心　日本女子大学紀要人間社会学部, **6**, 145―159.

山本真理子(編著)　1997　現代の若い母親たち―夫・子ども・生活・仕事―　新曜社

(1998.5.15 受稿, 10.20 受理)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Value of a Child for Women : Why Have a Child Now ?

Keiko Kashiwagi (Shirayuri College), Hisako Nagahisa (Shirayuri College) *Japanese Journal of Educational Psychology, 1999, 47, 170—179*

The purpose of the present study was to examine the value of having a child for Japanese mothers in the context of the population revolution. Mothers were asked why they had decided to have a child ; their answeres were related to mothers' cohort (older vs. younger), number of children, and tendency towards individualizaion. Five factors were identified : 1) emotional value, 2) self-enhancement value, 3) social value, 4) dependence on the condition, and 5) child support system. The first three are concerned with psychological value of the child ; the last two relate to child care. All 3 psychological values were evaluated highly in both cohort groups, especially self-enhancement value. Social value was more highly recognized among the older cohort, dependence on the condition more strongly in the younger mothers. The mothers' tendency toward individualizaion was significantly related to their attitudes toward their child : the stronger the tendency toward individualizaion, the lower the mothers' evaluation of the value of the child, and the higher the tendency to recognize dependence on the condition.

Key Words : value of child, women's issues, individualization, population revolution

NII-Electronic Library Service